17世紀後期～18世紀前期、萩藩の武家屋敷に対する 申請作事規定を通して見た建築行政について

(山口県文書館所蔵毛利家文庫「屋敷方作事方御書附」を中心に)

—萩藩の建築規制に関する研究 その4—

REGARDING THE CONSTRUCTION ADMINISTRATION, VIEWED FROM THE POINT OF THE REGULATIONS ON APPLICATIONS FOR BUILDINGS OF HAGI CLAN SAMURAI RESIDENCES (CIRCA 1680'S—1720'S)

(Focusing on "Yashikigatasakujigataonkakitsuke" possessed
at Yamaguchi prefecture document hall [Mohri family library])

—Part 4 of the study of Hagi clan architectural control—

妻木 宣嗣*

Noritsugu TSUMAKI

In this document, I studied the regulations on applications for buildings of Hagi Clan Samurai residences for the period mentioned above, pointing out the following:

1. The applications were screened in three ways in Hagi Clan. One was by the leading members of the clan, and the second one was by Metsukegata, the clan's construction administration section, and the third one was the one that applications for buildings were not screened if those were less than 1 tsubo ones.
2. Metsukegata proceeded with law judgment and construction administration, consulting leading clan members whenever a decision could not be reached.

*Keywords: Architectural control, The Hagi Clan, Samurai residences,
circa 1680's -1720's*

建築規制、萩藩、武家屋敷、17世紀後期～18世紀前期

1. はじめに

筆者は以前、萩藩における寺社建築物に対する建築規制（以下規制とする）について考察を試みた¹⁾。また武家屋敷に関する規制についても、天保期の屋敷取り締まりとの関連で若干の考察を試みたが²⁾、管見の限り萩藩については武家屋敷に対する建築法令を網羅的・体系的に記録した資料は確認されていない³⁾。

こうしたなか、萩藩の規制を知ることのできる資料として「屋敷方作事方御書附」がある（以下「御書附」とする）⁴⁾。「御書附」は、基本的には寺社・武家屋敷に関係なく、屋敷奉行あるいは作事奉行、寺社奉行所などが建築行政上問題となる（あるいはなり得る）法解釈について、彼らが直接当職あるいは当役へ問い合わせ指導を受けた記録や、竣工検査などを担当する目付方が、上述と同じ理由で当職あるいは当役へ問い合わせ指導を受けた記録などといった、各行政セクションの記録を屋敷奉行所あるいは作事奉行所が写し取ったものである。したがって本資料に記録された情報は、基本法令そのものは少なく、むしろ作事申請時あるいは見分時（竣工検査）といった、より具体的な建築行政の実務レベルでの法運用とその解釈を記録したものである⁵⁾。こうした資料的性格を考慮する必要性はあるが、視点を換えれば成文法令のみではみえてこない、建築行政における実務レベルでの取り扱いを考える上で貴

重な資料であるといえる。

ところで萩藩では建築行政のうち、特に竣工検査など実務レベルにおいて重要な役割を担ったのが目付方である。

【資料1】⁶⁾

覚（品定の事）

（前略）

[15]

一新作事の儀、御家来中寺社家共ニ焼失跡崩家は各別、両親并嫡子居所、又は御役ニ付人馬置所并ニ蔵物置等、至極無抛道理を以願出候ハ、依其趣有掛りの差図御詮儀の上可被差免候事
付、為火用心茅葺板葺を瓦ニ仕替候儀可被差免候事
付、素返并住居替の儀ハ有掛り差図相添、御目付衆え相届聞届相成、成就の上見分を可被請候、尤寺社共ニ萩内の儀は寺社所より御目付衆え相達し、地方の分は御代官所へ申出聞届相成、是又成就の上も右ニ同しかるべく候、然間取繕ニ準へ物数奇ニ当ル作事の儀は全無用勿論の事

[16]

一足輕已下の家作の儀、逢棚長押土地構切椽備後表の畳、并床飾の卓香炉等、弥以被差留候事

（後略）

* 大阪工業大学工学部建築学科 講師・博士(工学)

Lecturer, Osaka Institute of Technology, Dr. Eng.

資料は文化5年(1808)と時代が下がるが、当職である毛利伊賀、当役である国司市正、さらには国元加判役の福原豊前、矢戸主計、毛利大蔵といった藩庁上層部から触れ出された法令である。本資料は全24ヶ条からなり、「御国中諸事の御法度、先年已来の御定雖為歴然、於今ハ難叶時宜も有之、今般改被仰付候、此条数の外は享保九年の御法、今以無相違候事」という前文のあと、例えば第[1]条「御家来中尋常の衣服、弥以惣綿服たるべき事」と御家来中、寺社、大工などの体裁に関する取り決めが記載されている。【資料1】はこのうちの第[15]、[16]条であるが、作事申請において興味深い内容が記載されている。つまり新作事については、「御家来中寺社家共ニ焼失跡崩家」以外は原則として禁止、しかし「両親并嫡子居所、又は御役ニ付人馬置所并ニ蔵物置等」といった特別の理由がある場合は、「依其趣有掛りの差図御詮儀の上可被差免候事」とある。ここで詮議するのは、藩上層部(例えば当職)である。またこれに続く「付」では、「為火用心茅葺板葺を瓦ニ仕替候儀」については、差し免じるとする一方で、「素返并住居替の儀」つまり現状と同じ立て替えあるいは住居替については、現状図面を添付し目付方へ届け出た上で、竣工検査を受けるよう指導を行っている。さらに萩内の寺社については寺社奉行を経て目付方へ届け出るよう指導している。つまり萩に関しては、寺院・神社共に目付方へ届け出る際、当事者である寺社から彼らの管轄役所である寺社奉行所へ作事願書を提出し、そこから目付方へ届け出るといった手続きを行っていた。ここには御家来中、つまり武家屋敷に関する記載はないが、寺院・神社がまずその管轄役所である寺社奉行所へ願い出ていることを考慮すると、御家来中に関しては所属する各組の組頭へ願い出、場合によってはそこから屋敷奉行へ願い出た上で目付方へ届け出たと考えられる。また【資料1】からは「素返并住居替の儀」については目付方への届け出は必要であるものの、藩上層部への願い出詮議が求められていない点は注目できる。つまり藩側は、藩上層部への願い出詮議の必要な作事と、目付方による許認可で可能な作事とを分けていたことになる。

このことは、以下の資料からも確認することができる。

【資料2】

奉伺候事

此段当役中承届可令改被候事

内長屋其外小部屋等有懸り之家を、其儘引直相成由■■■家之儀者上葺壁杯取除候共、木道具不能崩少々所を替、引直之分ハ向後私共承届可被差免哉之事

七月十一日 御目附中

右寛保元七月御肩書相成同月廿八日 御陸目付松井七郎右衛門江渡之

本資料も寛保元年(1741)と時代が下がるが、御陸目付松井七郎右衛門による当役への問い合わせと、その回答を記した書類が記録されたものである。ここで目付方は「内長屋やその他小部屋などをそのまま引き直す時、つまり少々崩れている箇所を修理し、上葺き・壁などを取り除いても、木道具を取り除かず引き直す分は、今後(目付方)届け出があれば私共(目付方)で差し許してよいか」と当役へ問い合わせている。これに対して当役は内長屋、その他小部屋の、①少々崩れている箇所の修理、②上葺き・壁などの取

り除き、および③木材の取り替えなし、などを伴う引き直しについては、当役による審査が必要であると指導しており、藩上層部(ここでは当役)は、明らかに目付方への届け出のみで可能な作事と、そうでない作事とをわけていたことになる。

以上を考慮した上で、本稿では主に「御書附」を基礎資料とし、主に①どのような作事が目付方への届け出を必要としたのか、また②どのような作事が目付方への届け出が不要な作事だったのかを中心にしつつ、萩藩の建築行政の一端を考える。

なお萩藩における武家屋敷に対する規制は、寺社建築物に関する規制と同様その画期として享保10、11年が考えられること⁷⁾、つまり享保10年に作事願書へ記載すべき作事行為が具体化していることなどから、この時期何らかの法令整備が行われたと考えられるため⁸⁾、本稿では紙数の関係も考慮し、まず享保10、11年とそれ以前に注目し、享保11年以降については別稿で論考することをあらかじめ断っておきたい。

2. 享保10年までの状況

先にも述べたが、萩藩における作事願書への記載が具体化されるのは、享保10年の「作事願書之大格」である。これに対し「御書附」には、それ以前の規制行政を窺い知ることのできる記載がある。

【資料3】

- [1] 一湯殿 雪隠
- [2] 一家蔵共内造作并取繕共
- [3] 一堀立屋
- [4] 一堀立堀
- [5] 一堀石垣之仕直
- [6] 一長屋堀平窓明候事
- [7] 一外輪ニ而茂長屋を解、跡へ堀を付ケ候事
- [8] 一壺畳敷之庇
- [9] 一縁通杯萱屋を板屋ニ仕候儀、尤間数延申ニ而ハ無之事
- [10] 一堀之上最前よりも輕仕直シ候段者不苦との事
- [11] 一堀堀所替不苦との事
- [12] 一板屋板庇之棟を立萱屋ニ仕候分坪数不増候得ハ不苦候事

右之段相伺候候ニ不及御伺之由ニ而、御目付衆江茂其段申達候事
延宝八申 閏八月廿日

本資料がどのような経緯で作成されたかは不明だが、おそらく目付方への届け出が不要であった作事であると考えられる。記載項目を具体的にみると、いずれも屋敷本体ではなく、湯殿や雪隠、または庇や堀といった付属的な、あるいは小規模な作事に関するものであることがわかる。なかでも第[3]条から藩側は「掘立」構造という軽微な構造を、目付方への届け出不要作事とそうでない作事との判断根拠の1つとしていた⁹⁾。

【資料4】

覚

- [1] 此段古道具少ニ茂残取合仕候分不及御伺候、不残新道具ニ仕候分ハ申伺候候ことの一門を今度之洪水諸道具共ニ不残流候分ハ、新道具ニ而無之候而者不相成候、ケ様之儀者御伺ニ相成可申哉之事
- [2] 此段間数坪敷有懸り之分ニ無相違古道具ニ而仕分ハ不苦候、不残新道具ニ而仕候ハ申

伺候様ニとの事

一堀立屋今度之洪水ニ倒候地を■石すへル仕度与申出候、
ケ様之趣茂御伺ニ相成可申越之事

宝永貳酉 六月

この「覚」の資料的性格も前後関係が明確でないため不明であるが、おそらく目付方が藩側上層部（例えば当職など）へ、見分（竣工検査）など、建築行政上判断の難しい事柄について問い合わせた内容の記録であると思われる。また「覚」が出る前に萩城下で洪水があったようで、その内容はいずれも洪水によって被害をうけた建築物の再建に関するものであることがわかる。記載内容を具体的にみていくと、第〔1〕条では「洪水によって諸道具共に残らず流されてしまった門については、新道具（新材）でないと再建できない。このような場合は（藩上層部への）作事のお伺いは必要か」なる目付方の問い合わせに対して、藩上層部は古材を少しでも残し、新材と取り混ぜている分については作事伺いは必要ないが、全てを新材で作事する場合は目付方へ伺うようにとの判断を行っている。また続く第〔2〕条では洪水によって倒れた堀立屋を石据え（礎石建ち）にしたいとの願い出について、藩側は間数・坪数がそのままであることに間違いなく、古材で作事した分については差し支えないこと、ただし残らず新材で作事する場合は伺うようにとの判断を行っている。本資料をみる限り、第〔1〕条、第〔2〕条とも再建時、目付方への伺い必要・不要の線引きで重要なのは「古材を用いているか否か」であった。

【資料5】

覚

- 〔1〕一焼失之跡江者、新普請可被差免候事
 - 〔2〕一古屋ニ而倒屋取立不相成候ハ、新普請可被差免候事
 - 〔3〕一在郷住宅ニ而居候江者、御役被仰付出萩仕居所無之候て新可被差免候事
 - 〔4〕一御役被仰付馬持既無之候ハ、馬置候所新可被差免候事
 - 〔5〕一居宅未相調手狭ニ而居候所ニ婚礼等相調候、付而さしかけにても不仕候八年ニて不相調儀有之者之儀者、少々作事新可被差免候事
 - 〔6〕一物置等之類を引直を■可被指免候事
- 右前書之分ハ無廻儀候間、新規之普請可被差免候已上

宝永貳酉

十月

この「覚」は宝永2年（1705）10月、差し免じられる新規作事についてまとめられたものである。具体的には、①焼失の跡（第〔1〕条）、②古い家で倒壊し（元通りに）建て起せない場合（第〔2〕条）、③在郷住宅に居住している者へ御役を仰せつけられて出萩し、住まいする所がない場合（第〔3〕条）、④御役を仰せつけられ馬持でありながら厩がない場合（第〔4〕条）、⑤居宅をまだ調えず手狭な住まいで婚礼などをおこなったが、8年経っても作事が調わない場合における少々作事（第〔5〕条）、⑥物置などの類を引き直す場合（第〔6〕条）、以上については新規普請が許可されている。しかしいずれも「無廻儀候間、新規之普請可被差免候」であることから、やむを得ない理由がない限り新規作事はできなかった。

【資料6】

追而不及御伺普請

- 〔1〕一屋敷内之仕切塀并塀中門之事
- 〔2〕一外廻之板屋を瓦ニ仕替候之事
- 〔3〕一長屋塀等ひしき竹ニて包候事
- 〔4〕一塀覆瓦ニ仕替之事

以上

右之通正徳四年四月十日、御当役中御寄合之上相極り、御目付衆ニ茂写遣候、尤支配々々江分知せ候事

正徳四年十月相極り候

- 〔5〕一境内仕切壁御伺ニ不及候事
- 〔6〕一外廻り板屋を瓦ニ仕直候事

右不及御伺候段ハ正徳四年春被仰出候、右外廻りと有之候者庇之儀御座候間左様御心得可被成候、門其外棟を立候板屋を瓦ニ仕候得者御伺ニ懸り候間、此段御半間中江分被仰伝候様ニと存候、為其如是御座候以上

享保三戌

五月十一日

井上七右衛門

八木甚兵衛

御目付

熊谷与右衛門様

本記録は享保3年（1718）に記録されたものであるが、部分的には正徳4年（1714）の4月・10月に取り決められた事柄が記載されている。ただし享保3年の分は井上・八木（共に郡代官）が目付方へ通達したものである。注目できるのは、下線部①にあるように、門その他についても、棟を立てる板屋を瓦葺に葺き替えることについては伺いが義務づけられている。本資料では、塀や門における「棟のあるなし」が目付方へ届け出が必要か否かの判断根拠の1つとなっていたといえよう。

【資料7】

一毛利八郎左衛門、蔵作事最前被願出被差免候右蔵之金窓五ヶ所金網を張申度由追而被相願候付相伺候処ニ、最前之差図ニ金窓を被願出被差免たる儀ニ候得ハ、金網も金窓と申名目ニ籠たる儀ニ而者、金窓ニ仕網を張候とも亦網を張申間敷候とも其あたりの儀者面々勝手次第之沙汰ニ而可相済候間、其趣を以御沙汰候様ニと之御事、

右之通書付享保七寅六月五日当番之御目付出羽源八方江申達候事
資料の概略はこうである。毛利八郎左衛門は、蔵の作事申請を行い許可を得た。この許可を得た蔵には金窓が5カ所あったが、この金窓に金網を張りたい旨を作事見分（竣工検査）前に目付方へ願い出てきたので、目付方は藩上層部（おそらく当職クラスであろう）へ問い合わせたものである。ここで興味深いのが藩側の判断である。藩側は下線部①、つまりここでは「金窓か金網か」といった、ささいな差異にまで問い合わせてくる目付方に対し、この程度の作事変更については、「勝手次第」に作事する旨を目付方へ返答している。このことは言い換えると、金窓に金網をつけるといった程度の作事変更に対しても、目付方は自らの判断で決定せず、藩上層部へ問い合わせていたことがわかる。

以上が享保10年までの萩藩の武家屋敷に対する、作事届け出に対する行政判断であるが、ここではさしあたり以下の点を指摘することができる。まず【資料3】からは屋敷本体ではなく付属的な作

表一 「作事願書之大格」

対象	考察用番号	作事部分	「但」あるいは「付」
座敷廻	1	柱其外木道具の事	
	2	一天井板たんは声等の事	
	3	一長押	
	4	一小壁あひ	但 ほり物組物等は勿論、敷居鴨居障子等入候分迄ハ書付候事
	5	一窓	但 敷居鴨居かまち等入候分書付候事
	6	一床かまち	但 塗物ニて候へハ書付候事
	7	一書院床板違棚等書付候事	
	8	一襖障子の事	但 見分の節、未相調候ハ其段御目付え相達、惣の可被受見分候、襖障子出来の上、追ての見分ニ不及候事
	9	一板戸の事	付 杉戸まゐら戸の事
	10	一腰障子の事	付 塗かまちニて候ハ其段をも書付候事
	11	一板敷の事	
	12	一広縁切縁貫縁竹縁等書付候事	
屋根廻	13	一上葺の事	
	14	一垂木・裏板の事	
	15	一破風の事	
	16	一式台廻、右ニ准シ候事	
蔵	17	一ニ階の事	
	18	一上葺の事	
	19	一窓の事	但 鉄窓ニ仕候ハ其配書付候事
	20	一内外腰板の事	付 座を張候ハ其段書付候事
	21	一戸前の事	但 次戸土戸ひらき戸大たれの事
	22	一蔵下地石垣の事	
長屋	23	一上葺の事	
	24	一破風作の事	
	25	一出桁出垂木の事	
	26	一腰板腰瓦の事	
	27	一石垣の事	
	28	一かうし窓の事	
	29	一平窓の事	
	30	一内造作の儀は本屋ニ准シ書付候	
	31	一外輪の囲壁、右ニ准シ候事	
	32	一木道具の事	
門	33	一上葺の事	
	34	一組物ほり物の事	
	35	一柱巻扉釘等の鉄物書付候事	
	36	一此外の儀、屋作ニ准シ候事	

(註) 山口県文書館編『山口県史料 近世編 法制上』 1976年所収「作事願書之大格」を一覧にした。なお考察用番号は箇条書された資料の記載順を意味する。

事のうち、「湯殿・雪隠」、「老畳敷之庇」などといった小規模な作事については、目付方への届け出は必要なかった。また「掘立」構造が、目付方への届け出の必要な作事か、そうでない作事かの判断根拠の1つであった。加えて同じ【資料3】からは、小規模・軽微な作事における現状変更のない作事、あるいは現状より軽微な作事への変更についても目付方への届け出でよかった。さらに【資料4】からは、洪水後の再建における作事申請の有無の判断基準として古材の使用が意識されていた。さらに【資料6】からは、目付方への届け出が必要な作事か、そうでない作事かの線引きが、棟の有無に求められていたことがわかる。

以上から享保10年の「作事願書之大格」以前では、目付方への届け出有無の判断基準として、塀や門、湯殿・雪隠、一畳敷之庇といった小規模作事、「棟のない作事」や「掘立」などの軽微な構造の作事、あるいは「古材の使用」などを根拠にしていたといえよう。

また【資料5】からは、当時新規普請については何らかの理由がない限り許可されなかったこと、【資料7】からは軽微な作事変更に対しても目付方は自らの判断で決定せず、藩上層部へ問い合わせていたことが明らかになった。

3. 享保10年「作事願書之大格」とその解釈

さて以前拙稿でも若干触れたが¹⁰⁾、作事願書に記載の必要な作事行為が藩側によって具体的に示されたのが、享保10年「作事願書之大格」である¹¹⁾。以下ではこの享保10年「作事願書之大格」と、その翌年にみられる「作事願書之大格」の解釈を巡る当職と目付方とのやりとりについて考察する。

【資料8】

(前略) 10:

右作事の儀、差図を以被相願候処ニ、造作等之事区ニ有之如何ニ候条、此已後者右ニ記候廉々相違無之様ニ委細差図ニ書付可被申出候、左候て被差免₁、作事相調候上御目附衆江相達、可被受見分候、尤差図老通之内、追々ニ見分を請被申間敷候事₂、

但、作事ニ取付候已後、差図之内略仕、又者輕ク仕候分者勝手次第不苦之、其段改而願ニ不及候間、見分之節御目附江可被相達候、尤右ニ付紛候儀無之様可被仕候事。

一作事之願被差免候分、年を経候而も見分之沙汰延引之衆茂有之様ニ相聞、不詰之儀ニ付物定被仰付候間、自今以後は被差免候月より十式ヶ月を過候而茂作事不仕衆之儀者右之願捨リニ被仰付候₃、然者御定之月数之内ニ作事不相成候ハ、其訳支配方を以相届置追而取立之儀ハ改差図差出₄、如最前相伺可被申候、若月数過候迄作事不仕衆、其届於無之者可及御沙汰候、且又作事ニ仕懸り成就不仕内、御定之月数過申儀ニ候ハ其段御目附衆江被相達、二三ヶ月之儀者延引不苦候事

付、前々作事之願被差免、未相調御目付所ニ差図滞有之分享保八年已前者捨リニ被仰付候、享保九年正月以来之分者改而申出ニ不及候、本書之趣ニ准シ、当月より十二ヶ月を限り作事相調、可被受見分候事

已上

享保十已

十月朔日

先述のように、この「作事願書之大格」が藩から触れ出されるまでに、すでにいくつかの作事申請に関する取り締まりが設けられていたわけであるが、下線部①にあるようにそれらはいずれも統一した見解を示していなかったようである。この「作事願書之大

格」は、その前半部において作事願書に記載すべき建築物と作事行為について述べられ、後半は作事見分（竣工検査）に関する取り決めや、作事願書の有効期限などについて述べられている。このうち本資料の前半部分、つまり作事願書に記載すべき作事行為を記載順にまとめたのが表一である。これによれば、藩は作事願書に記載すべき対象を、座敷廻り、屋根廻り、蔵、長屋、門に分類している。つまり座敷本体については座敷廻りと屋根廻りに対して特に注意が払われ、その他はいずれも座敷に付属する建築物の作事に対するものであることがわかる。

次に「作事願書之大格」の後半部分に目を向けると、作事願書の申請・許可をうけた作事が成就（竣工）した際には、目付方による見分をうけるよう取り決められている。一方下線部③では申請・許可を得た作事について、竣工後「略」または「軽ク」、つまり申請した作事よりも簡略化された作事変更を行う場合については、「勝手次第不苦之」とある。さらに作事の簡略化については、改めて願い出る必要はなく、見分の際、目付方に「報告」するのみでよいとしている。

また下線部④⑤には、作事願書の有効期限についての記載がみられる。下線部④では作事が許可されてから日が経っているにも関わらず、見分を受けない者がいることを考慮し、今後は作事が差し免じられてから、12ヶ月を過ぎても作事を行わない者の作事願書は2・3ヶ月の猶予は認めつつも無効であるとしていると共に、下線部⑤にあるように12ヶ月以内に竣工しない場合は、相応の手続きを義務づけている¹³⁾。

このように萩藩では、享保10年に作事願書記載項目の整理と作事願書有効期限、さらには作事後見分の義務づけなどが具体化されたわけであるが、翌年にはそれまでに決められた作事届け出に関する取り決めを含めた法運用上の解釈を巡って、目付方から藩へ問い合わせが行われる。以下ではこの点について考察する。

【資料9】

奉窺候事

[1] 此段其町並脇町ニ而茂、袖塀新規ニ下付欄有掛り之門別直シ候分者下苦候、尤脇町江所を替候新屋敷方江之申出者各別之事

一門所替之事袖塀新規ニ不調候へ者不及御窺被差免候、所替之儀其町並屋敷間敷之内江者、何連江直シ候者苦間敷哉尤脇町江所を替候者可被差免哉之事

[2] 此段古長屋平窓之儀前々之通たるへき事

一此度之内作事御書付之内、平窓之儀御窺通り候由尔御座候、先年より平窓之儀者縦指窓ニ而茂被指免候、向後古長屋江平窓明候儀可被差免哉之事

[3] 此段本書之通たるへき事

一新作事調掛り無抛所江、一間之口を明ケ敷居鴨居戸障子入申度由毎々各江問候衆多御座候、右一間之所一ヶ所之儀ハ不及御伺、見分前廉各承届ニて可被差免哉之事

[4] 此段本書之通たるへき候事

付、作事調掛り柱増候てハ、家之弱ミに相成候儀有由毎事各承候柱老式本迄増候分者、見分前廉各承届ニ而可被差免哉之事

[5] 此段本書之通たるへき事

一新作事御願相済指図之内少々住居替之儀ハ、坪数増不申儀ニ御座候者各江見分前廉於相届者格別、不及御窺可被差免哉之事

[6] 此段本書之通たるへき事

付、蔵其外ニ而も雨落之所江瓦板之間、一枚通腰を包候分ハ強み乃ために御座候間、是又見分前廉各江於相届者承届ニ而可被差免哉之事

[7] 此段本書之通たるへき候事

一柱桁無シ之大たれ差出候分ハ、各承届ニ而可被差免哉之事
右御書被成被下候者、御述力を以沙汰可仕候以上

享保十一年

六月十一日

福島五郎左衛門

児玉市之助

兼重五郎兵衛

在江戸 児玉傳右衛門

在江戸 井上半右衛門

赤間関在勤 廻神甚五郎

有地又右衛門

右裏ニ

表書附書共ニ七ヶ条肩書之趣を以可有沙汰候以上

同日

毛 筑後（御国御留守居并加判役）

「奉窺候事」と題された本記録は、福島五郎左衛門（御城当番目付）以下6名の目付方による規制運用上の解釈に関する質問に対して、当職である毛利筑後が口頭で指示を行った際の記録である。具体的にみていくと、第[1]条では、福島らによる「門の場所を変えることについては、袖塀を新規に調えなければお窺いの必要はないが、門の場所変えはその町並屋敷間敷の内であれば、どの位置に作り直しても差し支えないか」なる質問に対して、当職は「町並・脇町でも、袖塀を新規に調えず、元からある門を修理して使う場合は、差し支えない。もっとも、脇町へ（門の）場所を変えた場合は、屋敷方への申し出は別にすること」と指示している。続く第[3]～[5]条は、いずれも目付方が軽微な計画変更について当職へ問い合わせたものである。まず第[3]条では「一新作事に取り掛かり、やむを得ず一間の口をあけて、そこに敷居・鴨居・戸障子を入れたいとの理由で目付方へ尋ねてくる者が多い。このような一間の所一ヶ所の場合はお伺いの必要はなく、見分以前に目付方が聞き届けていることで差し許されるか」、続く第[4]条では「作事の際、柱を増さないと家が弱くなるという理由で、ことあるごとに問い合わせてくるものがあるが、柱を1～2本まで増やすのなら、見分以前に目付方が聞き届けることで差し許されるか」、さらに第[5]条では「新作事のお願いが済み、その「指図」の内容と少々住居が変更している場合、坪数が増えていないなら、目付方へ見分以前に届けておけば、特別にお窺いをする必要はなく差し許されるか」、以上の問い合わせが当職へ行われ、これに対して当職は、いずれも「その通りでよい」と返答している。さらに第[6]条では蔵について、雨落部分の腰を瓦板一枚によって包むといった作事変更については、建物の補強にもなるので見分前の届

けがあればよいとある。

【資料10】

覚

- [1] 一貫をぬき敷居鴨居間壁無之堀立屋之事
- [2] 一湯殿雪隠之事
- [3] 一外輪ニ而茂長屋被解跡江壁を附候事
- [4] 一外輪古き壁石垣仕替之事
- [5] 一屋敷内仕切塀中門之事
- [6] 一長屋塀外廻り囲塀ひしき竹ニ而包候事
- [7] 一塀覆瓦ニ仕替之事
- [8] 一境目仕切塀之事
- [9] 一長屋を離れ候門葺板屋茅屋とも分瓦ニ仕替之事

付、長屋之板屋を葺屋ニ仕替之事

- [10] 一所替被差免候板屋茅屋ニ仕候事
但、本屋板屋を茅ニ仕事
 - [11] 一新作事一坪ニ足り不申仕諸之儀各より見分之前廉御目
付所江於相達者聞届ニ而相済候事
 - [12] 一茅外を瓦に仕替之事
 - [13] 一蔵金窓之上江金網を掛ヶ候
- 右従事先年不及御竊被指免之由、御書附又者御当職江、御目附より追々口上ニ而相伺被差免候分
- [14] 一外廻り之板底板屋を瓦ニ仕替之儀者不及御伺棟を立テ
板屋瓦ニ仕替之時者御竊入候事
 - [15] 一板底棟を立茅屋ニ仕候事坪数不増候へ者不及御伺候
 - [16] 一屋作り万石已上者三間はり相成、万石已下者式間半は
りより上者不被指免候事

右附紙ニ

別紙差図之作事願出候而者、三間梁之様ニ相見申候得共、外通りを取込間取仕候式間梁にて屋祢曾木葺ニ而御座候、右之趣屋祢ニ而相分り申候以上

右延享元子ノ十一月廿二日毛 伯耆殿家来より覚書申出候分
ひやし

右御目附方有之分、御陸目付宇多田忠兵衛書拔、遠近方へ持参有之候事

右作事之儀、従先年御書付を以被仰渡、又者御目付中より時々口上ニ而御伺仕候趣、前書之通ニ御座候、向後も此分ニ沙汰可被仰付哉御伺申上候事

享保十一年

六月十一日

福嶋五郎左衛門

児玉市之助

兼重五郎兵衛

在江戸 児玉傳右衛門

在江戸 井上半右衛門

赤間関在勤 廻神甚五郎

有地又右衛門

右裏ニ

表書之廉々前々之通可有沙汰候以上

同日 毛 筑後

右両通之伺書御肩書表書共ニ相調候付、享保十一年六月十二日御

城当番御目付福嶋五郎左衛門方之御歩行目付和田権右衛門江渡之候、尤支配支配江ハ右知せ之不及沙汰二者候事

本資料は御城当番目付である福嶋五郎左衛門ら目付方7名が、彼らの判断で許認可できる作事について、当職である毛利筑後へ再確認を行ったものである。このうち第[2]、[3]条については【資料3】、第[5]～[7]条については【資料6】ですでに取り決められているもの、また第[13]条は【資料7】が法令として成文化されたものである。次にその内容について具体的にみると、①掘立屋(第[1]条)や湯殿雪隠(第[2]条)、②塀や壁の設置に関するもの(第[3]、[4]、[5]、[6]、[7]、[8]条)、③屋根葺き替えに関するもの(第[9]、[10]、[12])など、いずれも軽微な作事について目付方への届け出が不要となっている。これに対して第[11]条では、1坪未満の新築については、見分以前に御目付所へ報告し「聞届」が必要になっている。また第[14]条では、外廻りの板底・板屋を瓦に仕替えることは伺いの必要はないが、棟を立てて板屋を瓦に葺き替えるときには、お伺いする必要のあることが、第[15]条では、既存の坪数を増さない、棟を立てた茅屋にする板底についてはお伺いの必要はない、といった棟を有する建物に関する届け出についての規定も記されている。このように小規模あるいは軽微な作事については作事申請の必要がないものの、棟のあるなし、あるいは1坪以上か未満かといった事柄が、作事申請基準における判断材料になっていたことがわかる。

4. まとめと今後の課題

以上本稿では、萩藩における武家屋敷に関する規制について、享保10、11年とそれ以前について考察を試みた。各資料から抽出し得た事象については各節で述べたので繰り返すことはせず、ここでは若干の整理を行いつつ、萩藩の建築行政の一端を考えることでまとめとする。

今回考察の基礎資料とした「御書附」が実務レベルでの法判断に関する記録集であるため、享保10年以前の、より具体的かつ基本的な武家屋敷に対する作事届け出基準を明らかにすることはできなかった。しかし今回の考察によって17世紀後期の段階で、藩上層部と目付方とのやりとりと、具体的な届け出の有無が取り決められていること、また届け出有無の判断材料として「棟の有無」、「礎石か掘立か」、「古材を使用する割合」などを確認することができた。

一方作事願書に記載の必要な作事行為は、享保10年「作事願書之大格」によって藩側から具体的に決められた。その一方で竣工検査など実務を担当する目付方からすれば、享保10年の「作事願書之大格」によって記載が義務化された作事行為項目は、どれも具体性に欠けていたため、目付方は【資料9】あるいは【資料10】といったかたちで、つまり享保10年の内容を当職へ直接問い合わせるかたちで「作事願書之大格」の解釈を具体化していった点は興味深い¹⁴⁾。

また「作事願書之大格」には、目付方からすれば実務処理に苦しみ規定がいま一つ設けられている【資料8】。目付方が問題にしているのは、どのような作事変更に対して再度の届け出が必要で、どのような作事に関しては「見分前廉各届ニて可被差免」、つまり

竣工検査前の目付方への事前報告で済むのかといった点が明確でないのである。つまり享保10年の「作事願書之大格」によって具体化された作事願書記載の作事も、竣工検査といったより具体的な実務レベルでの判断を伴う行政を担当する目付方にとっては十分であるとはいえず、結果として実務上必要な、より詳細な作事願書記載作事についての解釈を当職に求めていることがわかる。特に目付方は「作事願書之大格」の下線部③、つまり申請・許可を得た作事のうち、どの程度の作事変更が「差図之内略仕、又者軽ク仕候分」なのかを具体化することに苦慮したようである。「作事の簡略化とはどういったことを指すのか」が、作事内容によって判断に苦しむことは明らかであり、結果として目付方は【資料9】にみられるように、自ら判断出来ない作事行為について当職への判断を仰いでいる。例えば藩側は敷居と鴨居を設け、戸障子を入れた開口部については一間一カ所のみ（第〔3〕条）、柱の付け加えについては1～2本（第〔4〕条）、増坪のない少々の住居替（第〔5〕条）、などといった作事について「差図之内略仕、又者軽ク仕候分」作事であるとした。また竣工検査に対する判断を巡るこうした目付方と当職のやりとりによって、成文としての規制はより具体的になっていったと考えることができる。

ところで、目付方が作事の簡略化（軽微な設計変更）に対する藩上層部への問い合わせを行った理由の一端を垣間見ることができる資料として、先の【資料9】享保11年の「奉候候事」第3条がある。ここでは「新作事に取り掛かりやむを得ず一間の口を開け、敷居・鴨居・戸障子を入れたい」、といった作事変更を目付方へ頻繁に尋ねてくる者が多いことを述べていることから、目付方としては役所へ軽微な作事にまで問い合わせられることの煩雑さを避けるために、藩上層部へ明確な作事願書記載作事についての解釈を求めたとも考えられる。このことは見方をかえれば、規制をうける側も享保10年「作事願書之大格」の内容に対する理解に苦慮していたとみられることもできよう。

以上本稿では武家屋敷に関する規制について、享保10、11年とそれ以前の注目すべき規制に着目し、17後期～18世紀中頃までの萩藩の武家屋敷に対する規制を考えた。次稿では享保10年に打ち出された「作事願書之大格」が、行政実務に直面する懸案を通して、どのような解釈が具体的に与えられていくのかについて考察する予定である。

謝辞

本論考を作成するにあたっては、山口県文書館に所蔵文書を閲覧させて頂きました。また山口大学教育学部助教授の森下徹氏には史料発見のきっかけを与えて下さいました。さらに貝塚市教育委員会の曾我友良氏、大阪大学大学院の橋本孝成氏には史料解析に際して御教授を賜りました。ここに慎んで謝意を表します。

参考文献・引用および註

- 1) 拙稿「萩藩における寺社建築物に対する建築規制と作事申請手続き上の違反について―萩藩の建築規制 に関する研究その1―」『日本建築学会計画系論文集』、no. 541、2001. 3、pp205～212（以下拙稿A）、拙稿「萩藩寺社建築物における申請相違作事・不届け作事について―萩藩の建築規制に関する研究その2―」『日本建築学会計画系論文集』、no. 574、2003. 12、pp169～176（以下拙稿B）、拙稿「普請申請書類と全く異なる作事が行われた事例を中心とした萩藩寺院建築物における申請相違作事・不届け作事について―萩藩の建築規制に関する研究その3―」、日本建築学会計画系論文集、no. 581、2004. 7、pp175～182（以下拙稿C）。
- 2) 拙稿「萩藩武家屋敷に対する建築規制とその運用」、藪田貫編『近世の畿内と西国』清文堂2002年（以下拙稿D）。
- 3) ただし屋敷所有、あるいは街路に関する法令については、「諸触法」あるいは「諸触控」といった資料に散見される。なおこれら屋敷における所有に関する論考としては、松尾浩亮「萩城下における居住政策と屋敷売買・屋敷替」大阪大学文学部修士論文、2002年がある。
- 4) 山口県文書館所蔵毛利家文庫「屋敷方作事御書附」法令40（200-1）。
- 5) 例えば目付方の記録は、以下の資料から確認できる（「御書附」）。
 一国司助右衛門居宅作事被差免候然処、座敷之内床并押入両条之天井願書附ニ書落候、又々不及御窺各了簡ニ而相成事候哉与問合ニ而候致讃談見候処、先格茂不相見候付今日右之趣を以安房殿江相窺候処ニ天井纔之儀それのミ相願候ニ茂及間敷候間、見分前廉相届候ハ各中以下簡相調させ候様ニと安房殿被仰候、右ニ付物切之儀一坪迄了簡可仕候哉同候へ者、成程其通ニ致沙汰候様ニとの御事ニ付書記し置候事
 享保十六亥二月十八日
 当番
 兼重五郎兵衛
 右之達御目附所之日帳ニ記有之候
 このように目付所では、その日の行政実務を記録する日帳があり、屋敷奉行所あるいは作事奉行所などはこうした資料から、自ら参考となる出来事を写し書きしていたと思われる。なお屋敷奉行所は、屋敷の拝領や売買などを、また作事奉行所は作事関係などを担当していたと考えられる。また目付方は、萩市中にある建築物の見分（竣工検査など）を担当していたため、規制の細かい解釈を確認する必要があった。また一般的に江戸において藩政を司る職を当役、国元で藩政を司る職を当職という。当職、当役とも藩政の実質的なトップであるが、後述するように非常に細かい建築行政についてもその関与がみられる。
- 6) 「御書付其外後規要集5」山口県文書館編『山口県史料 近世編 法制下』1977年。以下本稿では特に出典を明記していないものは、「屋敷方作事御書附」を用いた。また資料中の〔 〕は資料中の第何条かを示し（ ）は補足、■は不明文字を示す。いずれも筆者加筆。
- 7) これについては前掲注釈1)のうちの拙稿Aでも若干言及している。
- 8) 享保期の「作事願書之大格」以降、藩側が着目する作事行為に大きな変更が認められないのは、「御書附」にも確認できる（別稿考察予定）。
- 9) 現在解析を行っている、武家屋敷における違反作事判例のなかには、掘立か否かが問題となった事例を確認することができる。例えば宝暦14年（1764）山田吉右衛門は、屋敷地内にある九尺四面の厩（曾木葺、掘立、腰板打付）を願い出さず作事した。のちに目付が見分したところ、すべての柱の根元に地面より高く土を盛っていた。そこで目付らが土を取り除くと、掘立柱であるにも関わらず柱下に切石のあることが判明し、厩は解除処分となっている（山口県文書

館所蔵 毛利家文庫「諸士御仕置帳」(51-15 87-57))。この事例から山田は礎石建を作事したかったものの、「掘立」という体裁を装うことによって見分を逃れ、礎石建の厩を作事していたことになる。建物を建てる側からみるとき「掘立」構造は、より審査の簡単な構造として理解されていたと共に、掘立であることを口実に規制をかわそうとしていた意図を読みとることができる。

10) 前掲注釈2)のうちの批稿D。

11) 「作事願書之大格」は他の複数の記録にも記載がみられる点で、萩藩の規制の基本法令であるといえる。

12) 前半の作事届け出基準については表—1にまとめた。よってこの部分は省略。

13) 作事願書記載項目の整理と作事願書有効期限については、天明7年にも再度確認されている(触書抜(9-52)(10-4))。

[1]

一作事之願被差免候分、年を経候而も見分之沙汰延引之衆茂有之様ニ相聞不詰之儀ニ候、物定被仰付候而自今已後者、被差免候月より十二ヶ月を過候而も作事不仕衆之儀者、右之願捨リニ被仰付候、然者御定之月数之内ニ作事不相成候ハ、其訳支配方を以相届置、追而取立之儀者、改差図差出■最前相伺可被申候、若月数過候上、作事不仕衆、其届於無之ハ

可及御沙汰候、且又作事ニ仕掛リ成就不仕内、御定之月数過申儀候ハ、其段御目付衆江被相達二三月之儀者延引不苦候段、享保十巳年被仰出候通相違無之御事①。

[2]

一右十二ヶ月之内ニ閏月有之時者、右閏月を者月数之不及沙汰候、尤閏月ニ被差免候分者勿論、其月より十二月を限、見分を請可申之段、天明式寅ノ年被仰出候通、相違無之候事

右之通今以相違無之候、然処ニ■リ月を物切と覚候衆も間々有之候様相聞ニ候、尚亦此度内意申達候様ニとの事

天明七未

三月

ここでは作事願書記載項目の整理と作事願書有効期限については、享保10年に取り決めが行われたこと(下線部①)、また12ヶ月内に閏月が含まれる場合は、閏月を含まないなど(第[2]条)、非常に詳細な部分まで取り決められていることがわかる。

14) またこうした対応は、享保11年以降も個別事例を通して展開されていく(これについては別稿で考察予定)。

(2004年12月9日原稿受理, 2005年2月22日採用決定)